
主役になれない主人公

宙希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主役になれない主人公

【Nコード】

N7844N

【作者名】

宙希

【あらすじ】

テンプレ？な死に方をした主人公が主役になれずがんばる話です。

プロローグ（前書き）

初めて投稿します。駄文ですがよろしくおねがいします。

ブローグ

平凡な日常とは簡単に壊れてしまう。そんな事を僕、『辻野 宙希』（つじの ゆづき）は今、思っていた。どうしてかって？何故なら…

「すみませんでした！」

「…」

今、現在形で老人に目の前で土下座されているからだ。いきなりすぎること僕はいくらも反応することができなかった。とりあえず今分かる事を整理してみよう。僕はごく普通の公立中学に通う13歳の中学二年生だ。誕生日は2月6日の早生まれ、さっきまでは学校に登校している最中だった…ダメだここまでしかわからない。

「すみませんでした！申し訳ありませんでした！」

僕が考え事をしている間に老人は何度も床にぶつけるくらいに頭を下げて謝っている。

「とりあえず頭を上げてください！」

「ハイッ！」

まずは目の前の土下座を止めさせて辺りをゆっくり見回して見たが、周りには壁も無くただ白い地平線が広がっているだけだった。少なくとも僕はこんなところは知らない。

「あの…少しお尋ねしてもいいですか？」

「何なりとお訊きください!」

「まず、ここどこですか?」

「ここは霊界といって、命を失った者が来る所です」

今この人は何を言った? 死んだ者が来る所ってもしかして僕って…

「そうです。貴方は死んでしまったのです」

「えっ… 僕死んだの!? ていうか僕の考えていた事なんでわかったんですか?」

「私が神だからです」

この人が神だって!? いや、今はそんな事よりも僕が死んだ事の方がよっぽど重要だ! いつ、どこで、何故死んでしまったのか知らない!

「あの… どうして僕は死んでしまったんですか?」

「申し訳ありません!」

「ちよっ、ちよっとどうして謝るんですか?」

「実はこちらの手違いで間違っつて貴方を殺してしまったんです!」

「間違いつて… どういう事ですか? まだ僕死んだっていう実感? がないんですけど…」

「貴方は交通事故に巻き込まれて死んでしまいました」

交通事故に巻き込まれてつてもしかしていわゆるテンプレって奴なのかな？

「もしかして、誰かをかばってトラックに引かれたとかですか？」

「そうです」

ちよつと前の僕なにやってんだよ！？僕はそんな正義感に満ちた奴じゃなかったはずなのに！？

「いえ、貴方は何もしていません」

「えっ！？」

「実際に死ぬ予定の者は暴走したトラックから子供を助けたサラリーマンだったのですが…」

「ですが？」

「トラックの運転手が途中で気がついてハンドルを切った先に居たのが…」

「僕だった」

神と名乗る老人は静かに首を下ろした。何て僕らしい地味な死に方だ！？いや、そんな事よりもこれから僕はどうなるんだ？

「貴方にはこれから別の世界に転生してもらつことになります」

「何も言っていないのに僕の考えてる事に反応しないでくれますか？
びつくりするから!？」

「すみません！」

「それで、別の世界って具体的にはどこなんですか？やっぱりマンガとかの世界何ですか？」

「正確にはフィクションの世界に行ってもらふ事になります」

「フィクションの世界？」

「現実ではあり得ないことがあるけど現実に近い世界と言えばわかりますか？」

「あり得無いことって例えば何ですか？」

「魔法や地球外生命体なんかが普通にありますね」

「……………」

あれっ!?!これって何かやばくない?だって僕は特別な力とか持っていないごく普通の中学二年生だよ!魔法とか地球外生命体ってそんなところに行ったらスグに死んじゃうんじゃないかな?いや、間違いなく死ぬ!断言するね!

「あのゝそろそろ話を続けてもいいですか？」

「あつ、はいお願いします」

「転生するにあたって貴方に力を与えたいと思うのですが何にしま

すか？」

「何でもいいの？」

「何でもいいですよ、大抵の事なら叶えますから」

な、なんだって！？神からどんな力でも貰えるってやっぱりテンプレだね♪なら僕が欲しい力は…

「仮面ライダーカブトになりたいです！！」

「それは無理ですね…」

えっ…いきなり否定されたよ！？

「ど、どうして？何でもいいって言ったよね！」

「これから転生する世界には既に仮面ライダーカブトが居ますから」

「それじゃあガタツ、ガタツクも既に居ますので…」

何だよ！？僕の好きな仮面ライダーになれないってこんなの詐欺だ！
！いたい僕は何ライダーになればいいんだよ…そうだデイクイド
になれば「一応言っておきますけど主役級ライダーにはなれません
から」

「主役級ライダーになれないって…なら何になれるんですか？仮面
ライダーカブトのライダーの中で何になれるんですか？」

「カブト、ガタツク、ダークカブト、ホッパー、劇場版に出てきた
新ライダー以外にはなれますね」

なんて事だそれじゃあ残ってるのはザビー、ドレイク、サソードだけじゃないか！この中から選ばないといけないのか…

「別に仮面ライダーにこだわらなくてもいいのでは…魔力無限とかなら簡単にできますけど」

「仮面ライダーになるのは僕の夢なんだよ！！」

落ち着け、落ち着くんた僕、あのライダーの中で僕が一番使えるであろうライダーを選ぶんだ。まずはザビーだけどパンチ、キックなんてしたこと殆どないからこれはパス次にドレイクだけど銃なんてシューティングゲームでしか持ったことしかない。しかも一度も全クリしたこと無いというかシューティングゲームは苦手なのでこれもパス最後にサソードだけど、小学生の頃からスポーツチャンバラをしてるから前の二つよりもマシか？よし決めた！

「僕はサソードになる！」

「わかりました。ではこれをどうぞ」

そう言って神は僕にグリップ？を渡したこれってサソードじゃなくて…

「これドレイクに変身する奴じゃないの！？僕サソードって言っただけど！」

「安心してください携帯しやすい様に柄だけにしただけです変身すれば刃も現れますから」

「それならいいんだけど、それじゃあ早速変身してみたい？」

やったー！これで仮面ライダーになれると思うとワクワクするよ変身ヒーローに変身するのは男の子夢だからね！

「わかりました。それでは転生を開始しますね」

何を言っているのか分からない僕は変身したいと言っているのに何故いきなり転生する事になるんだ？

「変身するにはここ霊界ではなくて転生した世界でしか変身できませんから、それでは行きますね」

「ちよつと待つ」

神が手をかざし光を放つのを目にしたのが最後僕は意識を手放してしまった。

ブログ（後書き）

どうだったでしょうか？ご意見などありましたらコメント頂けると嬉しいです

第一話（前書き）

続けて第一話です

第一話

聞こえる…頭の中に直接響くような音が、何度も何度も繰り返し頭の中に流れ込んでくる。この心の奥まで不快にする音は何だ？

「あれ…ここって」

周りを見回すいつも寝ているベッドの上にいるし、すぐ近くにある見慣れた机の上では何時まで経っても聞き慣れない音を鳴らし続けている目覚まし時計が何時もセットしている7時を指している。ということとは…

「何だ、夢か」

そう呟いて僕は今も尚鳴り続いている目覚まし時計を止める。普通に考えればそうに決まっているよね、テンプレで死んで神に会って仮面ライダーにしてもらって（まだ変身していなかったけど、しかも大好きなカブトじゃないし）最後の最後に転生って僕は何て厨二病なんだ…まあ中二なだけだね。そんな事より早く朝御飯食べて今日も学校に行かないとね。ベッドから降りて大きく伸びをしてそのまま二階にある僕の部屋から一階にある洗面所で顔を洗いリビングに入る。

「おはよう」

「おはよう朝御飯出来てるから早く食べなさいよ」

そう言っただけ返してくれた母が用意してくれた朝御飯に手を付ける。今朝のメニューはトーストにマーガリン各種ジャム類それとカップスープという作る方も食べる方も早く済ます事が出来るメニ

ユーだ。トーストに マーガリンとブルーベリージャムを付けてそれを頬張りながらテレビに映るニュースを眺める。

『今日のお天気は一日中晴れ比較的過ごしやすいお天気でしょう』

アナウンサーのお姉さん綺麗だなとか思いながらトーストを食べ終えカップスープを飲もうとするがまだ熱く若干猫舌である僕は『ふーふー』息をカップに吹きながら続けてテレビの中で笑顔を見せるアナウンサーのお姉さんを見続ける事にする。どうでもいいけどこのお姉さんは僕お気に入りのお姉さんだ。あの優しい笑顔と元気な声は一日の始めである朝食時に僕にやる気を与えてくれる。

『続けて次のニュースです』

天気予報の終わりと同時にお姉さんの出番も終わりこの後はおっさんアナウンサーが中学二年生ではよく分からない難しい政治に関してごちゃごちゃ言うコーナーだ。ここは適当に聞き流してカップスーを冷ます事に集中しよう。『ふーふーふー』とカップに息を吹き掛け続けて漸く丁度いい具合にスープが飲める温度になると同時に政治コーナーも終わったようだこの時点で時計は15分は過ぎている。早く飲んで制服に着替えようとスープを口に含む。

『続いて次のニュースです。昨夜深夜0時過ぎ神都町にて九人が殺害されたとの…』

怖いニュースが流れているしかも神都町かみやちょうって僕が住んでる町じゃないか気を付けないといけないな。

『なおこれらの事件はワームによって起こされたとの…』

今、何て言った？

『ワーム関しては魔術協会、ゼクトなどで対策を…』

テレビでは仮面ライダーカブトに出てくるワームがデカデカと映し出されておりニュースキャスターはワームに遭遇しても魔法などで攻撃せず速やかに避難し通報するようにと報道している。あれ？これってまだ夢の続き？なら早く起きないと

「宙希！いつまでテレビ見てるの！早く支度しなさい転校初日から遅刻するつもり？」

「えっ…転校！？どういう事！？前まで通ってた学校は？」

「まだ寝ぼけてるの？学校があつた地帯はワームの襲撃を受けて半壊したじゃないのニュースは見てるだけじゃなくてちゃんと聴くこともしなさいそんな事より早く準備しなさい！」

母にリビングから追い出されてしまった。いったいどういう事？もしかして本当にトリップしたの？不安に思いながら階段を上り部屋に入ると僕の疑問は一気に解決した何故なら…

「これって…」

部屋に入って一番目につく机の上には僕が神から貰ったグリップがそこにあつた。

第一話（後書き）

まだプロローグみたいですね。変身するのはもうすぐかかりそうです

第二話

あれから僕は学校へ行くために着替えなどの支度をして神から貰ったグリップ（サソードグリップと命名）を制服のポケットに入れて学校へ登校しようとした。

でも困ったことに肝心の学校がどこなのか分からない、母の話なら僕は今日からいつも通っていた所とは違う学校に転校するらしいとの事。

あいにく僕はこの世界に転生したばかりなのでこれから通う学校が何処にあるのかはもちろん、何という名の学校なのかさえ分からないといった状況だ。

さてどうしようか？僕に残された選択肢は3つ。

？適当に歩いて学校を探す。

？誰かに学校までの道を尋ねる。

？現実是非常潔く諦める。

この3つになるな。

まず？は遠慮したい転校早々サボリなんて教師に目を付けられてしまふ。

なら？か？になるけれど、どっちも難しいことは変わらない？はリスクが大き過ぎるし、？は学校の名前も知らないしどうやって説明すればすればいいんだ？それに周りには誰も居ない皆もう学校や仕事に行ったみたいだ。まあこのまま『ボケー』と突っ立ってるより

も動かない事には何も変わらないから取りあえず移動しよう。

しばらく歩き大通りに通りかかった。流石大通り人が沢山いる。その中の何人かに制服を見せ、学校が何処か聞き出すと何でもワームが襲撃した地帯はかなりの規模でこの辺りの学生は皆バスに乗って隣街にある学園都市に通う事になるようだ。

行き方が分かれば後は簡単だバス停に向かいバスを待つ、ここでも時計を見てみると時間は8時20分。

うん、確実に遅刻だ。ヤバイさっきの選択肢の答えはどうやら？のようだ。転校早々に教師に目を付けられてしまうだろう。でも流石はフィクションの世界さつきは普通にスルーしたけど、学園都市なんて物が存在するなんてスゴイものだ、いったいどれくらいの大きさなのかワクワクしてしまう。

そうこうしている間にバスが到着したようだ。本来なら学生用の所謂スクールバスといった物で無料で乗れるらしいのだが、遅刻間近の僕には関係ない話だ。片道350円を払って普通のバスに乗らなくてはならない。無駄な出費は出るわ、教師に目を付けられるわ遅刻なんて録な事が本当に無いこんな時事故とか起きたら言い訳出来るのにと考えるのは遅刻をした事がある人なら誰もが少し位なら考える事だろう僕もその一人だ。

まあ事故何か起きずに普通にバスは学園都市前まで無事に到着し、そこから事務室に行き転校生だという旨を伝えしばらくしてから僕が通う学校の名前が漸く分かった。

『麻帆良学園男子中学校』

それが僕が通う学校の名前だ。

あれっ？何処かで聞いたことがあるようになってここ確かネギまに出てくる学校っていう事？なら魔法とか出てくるのも納得だ。でも魔法の事はこれっぽっちも隠す気はないみたいだね。今は原作どの辺りまで来てるんだろう？気になるけどまずは僕自身の事をしなくては。

僕が新しい教室2-Cに入る事が出来たのは一時間目が終わり二時間目からだった。この授業はタイミングよく担任の担当らしかったのでそのまま僕の簡単な自己紹介が行われた。ちなみに遅刻の件は転校してきたばかりということで不問という事になった。

あっという間に今日の授業が終わりを迎えたのはいいが今僕はスゴイ危機に陥っている。
何故かって？僕の目の前に両手の指よりも多い数のワームがいるからだ。

どうしてこうなったのかは少し前の出来事を振り返らないといけない。

「ちよつといいか？」

帰りの支度をしていると声を掛けられた。そこには僕より頭1つ分高い（僕の身長は157→158）いかにも運動部です！といった感じの男子が居た。話を聞くと、どうやら彼はこのクラスの委員長であり転校してきたばかりの僕に学校の案内をしてくれるようだ。その申し出に僕は甘えることになった。

彼の名前は高岩君といい剣道部に所属しているようだ。この高岩君にスゴク親切に学校の教室を丁寧に教えてもらいながら話を聞くと彼は魔法使いで、魔法剣士を目指しているらしい原作キャラよりも

先に魔法使いに出会うとは思わなかったがまあそれはいい、問題は高岩君の案内が長引いて帰りのバスの時間に間に合わなくなってしまうかもしれないという事だった。すると高岩君は

「俺にまかせろ！」

と言ってバス停への近道である裏道を案内してくれる事になったのだが、何とそこでワームに遭遇してしまったのだ。初めて生で見たワームはテレビの中とは全く違いまるで恐怖がそのまま形になったかのような存在だった。そんなワームに高岩君は真っ先に魔法の射手を放ったしかも無詠唱で10本でもワームには全く効かず逆にワームの接近を許した高岩君は吹っ飛ばされて気を失ってしまった。まさか転生初日でこんなにもピンチに遭遇する事になるとは思ってもみなかった。

ここで問題だ！

僕と高岩君はこれからどうなる？

？僕が何かの力に目覚めてワームをやつつける

？アメリカンヒーロー並のタイミングのよさで原作キャラ登場&撃退

？現実是非常僕と高岩君はワームの餌食に…

そんなことを考えているとワームが近づく

『？』 現実是非常

高岩君を吹っ飛ばした爪が僕に…襲ってくることは無く逆にワームが吹っ飛ばされていた。

そつだよ、さっきまで麻帆良学園生活を送ってたから忘れてたけど

僕は『仮面ライダーなんだ!!』

右手でポケットからサソードグリップを取り出し、さっきワームを吹き飛ばしたサソードゼクターを左手で掴む。

「変身!!」

『H E N S H I N』

僕の体がゼクターから発せられる機械音と共に鎧を纏い、身長は元の大きさよりも遥かに高くなった。これが強固な鎧に身を包んだ姿『マスクドフォーム』だ。変身完了と同時にワームの群れの中へと『サソードグリップ』改め『サソードヤイバ』を構えながら突っ込み目の前のワームにヤイバを突き立てる。続けてそのまま横に薙ぎ近くにいたワームを纏めて斬り捨て、残りのワームを斬って、払って、突いて、兎に角無茶苦茶にヤイバを振り回しワームを倒した。こうして僕は初めての変身と戦闘を体験した。

第二話（後書き）

戦闘描写難しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7844n/>

主役になれない主人公

2011年10月7日23時32分発行